

他国研修は自分を変える力を秘めているのか

齊藤 啓太
Keita SAITO
数理情報学科 3年

1. はじめに

2017年の8月17日、私は初めて海外へ上陸した。私はグローバル人材育成プログラムメンバーの1人としてサンフランシスコで約2週間ホームステイをしながらインターンシップ活動を行った。9月4日に日本へ帰るまでにアメリカの地でアメリカ人として英語圏で生き、インターン先で働いて今までの教育の中では味わえなかったチームとしてタスクをこなす体験をするという目標をもって研修へ挑んだ。

2. スケジュール

今回のプログラムの期間は約2週間で尚且つ最初の2日は他の学生たちと観光・企業巡りツアー・講演会があったので、ホストファミリーの家に滞在していたのは8月20日から9月3日までの間だった。その間にある休日は基本的にはホストファミリーと一緒に過ごしたり外出したりと学生が自分たちのしたい様に過せる日だった。

3. 企業巡りツアー

アメリカに到着して最初の2日間はアメリカの大企業を見学した。Oracle社の前で写真を撮ったり、Googleの社内に入れてもらって社内食堂で昼食をとって見学させて頂いたりした。特にGoogleの社内見学はとても楽しかった。会社のオフィスの中にいるという事を忘れるほど自由なオフィスで、ゲームがおいてあったり、50メートルおきにスナックやドリンクが常備されているスペースがあったりした。しかしすべての企業がこのようなオフィスを持ったとして本当に作業効率が上がるかということそう

ではないだろう。Googleに入社するためには自律ができていて尚且つ秀でた才能が必要である。弱い意志の人間が入社できたとしても、仕事と休憩のバランスが取れずにすぐにやめてしまうことになる。アメリカの企業は自由なオフィスが多いが、それは個人の能力と管理能力を信じてのことであり、その2つの条件を満たさない者はこの様な会社では務めていけないだろう。

4. アメリカでの生活

アメリカでの生活は私が出発前に思っていたほど苦しくは無かった。ホストファミリーともある程度の会話はできたし、街に出て道を尋ねても皆優しく対応してくれた。ドルの札やコインの扱いにも慣れた。

海外の生活にあこがれを感じていた私はホストファミリーが提案する観光地の情報を半分耳に入れながら街に出て寄り道をしてその度に新たな発見をしては楽しんでいて、寄り道しすぎてChina townからJapan townまで歩いて行ったらホストファミリーのお母さんから“You are crazy.”とも言われた。

基本的にアメリカは歩行者が少なく、車や公共交通機関を利用するのが当たり前であるらしい。私は自分の足で歩いて街を散策するのが楽しかったので、少しの距離なら歩いて移動したが、やはり遠方へ訪れる際はBART（地下鉄）やMUNI（バス）といった交通機関を利用した。

5. ホストファミリー

ホストファミリーの家にはすでに先客が2人おり、別の日本男子学生とフィリピン人の女性があった。

ホストファミリーの家族構成は父・母・息子3人・犬1匹だが息子は3人とも大学へ入学して家には住んでいない。ホストファミリーの両親はとても親切にしてくれた。お母さんには初日にインターン先の企業への行き方を教わったし、お父さんとは一緒に映画を見たり寿司レストランへ行ったりした。両

親ともにフィリピン人の方々が英語に少し癖があったが比較的聞き取りやすくよく会話できた。しかしやはりわからない単語やフレーズが出てくると会話が途切れてしまったりもした。そういう時は英語でその単語の説明を言ってくれるので理解できた。連絡先も交換して、また遊びに行く約束もした。今度また訪れる時までには英語力を伸ばしてまた会う時にはスムーズな会話ができることよう、勉強に励みたい。

6. インターン

私がサンフランシスコを訪れたのはホームステイして観光するわけではなく、インターンシップ生として企業で働くためだ。実習先は kintone という会社で、日本の Cybozu 社の子会社である。Cybozu は企業向けグループウェア分野ではシェア 1 位を獲得する大手企業だ。Cybozu 社の kintone という製品をアメリカに普及させるために 3 年前にアメリカで kintone 社が作られた。私の主な業務は kintone アプリをカスタマーの企業に提案する際に使用するサンプルアプリの作成、またそれらアプリを説明する際にわかりやすくするためにデモデータを登録する作業だった。タスク管理や出社・日報などもすべて kintone アプリで行い、タスク進行度合いも kintone を通して連絡しあった。仕事を受けて確認した旨を伝えタスクをこなした後、添付ファイルを送信して終わった旨を伝えた。当たり前のことのように聞こえるが、私には新鮮に感じた。今までの学校や大学ではなかなか体験できないことだ。

働くという事はただ仕事をこなすということではなく、その情報を共有することがとても重要ということを学んだ。

7. グローバル人材

今回の研修の名にある通り、グローバル人材の研修として行われているこのプログラムで私がグロー

バル人材についての考えの変化について話そうと思う。一般的に「グローバル」と聞くと、海外で活躍してその国の言語が話せる人という考えが多いと思われる。しかし今回アメリカのオフィスで働いてわかったことは、英語が下手でも活躍できるということだ。英語が苦手でも、簡単な単語でなんとか文を作ってコミュニケーションを取るだけでも仕事はできる。つまり、グローバルであるために言語の壁は大きな問題ではない。何が重要かという、「今までと違う環境にどれだけ早く馴染んで相手との適切な距離を保ち、信頼関係を築けるか」このことが重要だと私は思う。より多くの人にこのことに気付いてもらい、海外進出を考えてほしい。

8. おわりに

出発前の私の心情は少しの期待と大きな不安が混ざっているような心情だった。英語力がそれほど高いという訳でもないし、コミュニケーションが得意という訳でもないような学生が 2 週間物間海外でやっていけるのかという疑問が尽きなかった。しかし行ってみるとやはり楽しめたし、2 週間では足りないと感じるほどになった。もしこのジャーナルを読んでいる方で海外生活をしたいけれど怖くてためらってしまっている方がいれば、ぜひ今の状態から一歩前進してほしい。不安が感情の大部分を占め、前日全く眠れなかった私でも十二分に楽しめたのだ。何か少しあこがれのようなものを感じているのであれば、恐怖はすぐに消えてしまう。そして恐怖が消えればあとは自分がやりたいことを全力でできる。そしてこれは海外へ行くことに対するためらいだけに限った話ではない。何か新しいことにチャレンジするためらいに対しても、まずは行動を起こさないと成しえない。

「為せば成る、為さねば成らぬ何事も」

このことが今回の実習で得た一番の経験だと思う。